



みち 古道が紡ぐ物語



伊勢神宮創建の歴史をたどる桜井・宇陀の道

～伊勢街道編③～

横大路「八木札の辻」を東に進むと、田園風景の先に、記紀・万葉に名高い耳成山、天香具山、さらに、秀麗な三角錐が遠望された神奈備（神が宿る山）三輪山が近づき桜井市へと入ります。ここから南には飛鳥、北には三輪、纏向と、古代王権が発祥し国家形成が進んだ地域が広がります。

日本書紀によると、伊勢神宮の起源は、第11代垂仁天皇の御代に天照大神を三輪付近の笠縫邑より伊勢に遷座したと記されていますが、国家黎明期のことであり明確な年代は定かではありません。また、現在三輪山をご神体とする大神神社の主祭神が出雲系の大物主大神であることも、大王家（天皇家）の王権確立期における謎の一つで、この周辺には数多くの歴史ロマンが秘められています。

八木札の辻を出て古代史の宝庫桜井へ

横大路八木札の辻（榎原市）を東にたどると、街並みから耳成山が姿を現す。天香具山、畝傍山を加えた大和三山は、記紀・万葉にもたびたび登場し、平成17年には国の名勝に指定された。

さらに桜井市との境に至ると、伊勢参りの際には目印ともなった大きな櫨の古木が目を引く。江戸期の「大和名所図絵」にも登場する三輪神社である。この境内の西側には、かつて平城京と藤原京を結んだ南北の古道、中ツ道との結節点があるが、今はほとんどが田園に姿を変えている。

少し東進した街道筋にJR桜井線香具山駅がある。南側一帯はのどかな田園風景と、その向こうに天香具山が遠望できる。先ほどの中ツ道は天香具山を迂回し飛鳥へと至る。

香具山駅をさらに1.5kmあまり進むと、大和川の源流の一つである寺川に架かる小西橋に出る。奈良県教育委員会の「歴史の道調査報告書」では葛城市から続いた古代の横大路はここ小西橋までとされている。ただ、時代が下れば、さらに東の慈恩寺の追分までとされる。平城京からの古道である上街道との結節点で、伊勢へ続く初瀬街道の始点でもある。

小西橋から東は商店街が続く。桜井は、古くから製材業が盛んで、また、県南部の吉野森林地域の木材や特産品の集散地として賑った。近年は、

国産木材の低迷でやや活気を失いつつあるものの、往時をしのばせるたたずまいは、街道沿いのあちらこちらに今も残る。



桜井の街並みを抜け、三輪山（奥）を望む。

天照大神伊勢遷座の起点三輪山を望む

桜井の市街地を抜けると田園地帯となっていく、三輪山を南から望むことができる。古代、天皇家の氏神ともいえる天照大神が鎮座し、「天皇霊」が宿ると敬われた神奈備（神の宿る山）である。

日本書紀によると、第11代垂仁天皇の御代、相次ぐ国の乱れや疫病により、天照大神を他所に祀ることとなり、天皇の命を受けた皇女倭姫命が、適地を求めて菟田（現宇陀市）、近江、美濃などを廻ったのち、伊勢に至ったとされる。

三輪山から東は、いよいよ「たたなづく青垣」、丘陵・山間地に入っていくが、街道はしばらく初瀬川沿いの低地に行く。古代、三輪山に奉仕した齋宮（神を祀る皇女）、神女たちが禊をするため

初瀬川の奥に齋みこもりしたことから、「こもりく（隠国）の」が「初瀬」の枕詞となったという。



長谷寺門前町（上）から峠を越え、榛原札の辻（下）で伊勢に向けて二つの街道に分かれる。

万葉集巻頭を飾る雄略天皇の宮跡へ

国道 165 号線を縫うように初瀬街道（伊勢街道）は続くが、この辺りには、古代天皇の宮跡伝承地がいくつも点在する。

万葉集は「籠もよ み籠もち 掘串もよ…」という歌で始る。王権の確立に高揚した雄略天皇の恋歌であるが、同天皇の「泊瀬朝倉宮」跡とされるのが白山神社である。国道に沿った所に境内があり「万葉集発燿讚仰碑」が建つ。

さらに行くと、街道は国道から別れ出雲集落に入るが、旧街道沿いにある十二柱神社のあたりは、武烈天皇の泊瀬列城宮跡との伝承がある。

出雲は、垂仁天皇期に出雲の土器製造の工人、土師部が移り住んだ地で、それまでの殉死の風習に代わるものとして埴輪作りが始まったという。境内には出雲国出身の野見宿禰を祀る五輪塔も建つが、相撲の始祖であると同時に、土師氏の祖として敬われ、後に菅原道真などが出た菅原氏の祖でもある。

平安文学の地、こもりく（隠国）の初瀬へ

初瀬川沿いの低地を進むと、街道は西国三十三所観音霊場の第八番札所長谷寺の参道に入る。

平安期に盛んになった観音信仰の霊場として、たびたび「源氏物語」「枕草子」「更級日記」を始

めとする平安文学にも登場し、古くから門前町が形成された。

門前の街並みには、今も江戸期の建物がいくつも残り往時の繁栄を感じるが、近年は、過疎化で空き家も多くなってきた。そこで、平成 21 年、「NPO 法人泊瀬門前町再興フォーラム」を中心とした地域住民と、早稲田大学、そして奈良県の協働による街並み保全と活性化事業が開始された。

その一環として、同フォーラムでは、かつて食堂を営んでいた古空き家を改修し、観光・参拝客向けの食堂、休憩施設として、さらに、来訪者と住民、また、住民同士が交流を深めるコミュニティ施設として「泊瀬長者亭」をオープンした。

伊勢への分岐点榛原 ～伊勢への二つのルート～

初瀬から東、榛原（宇陀市）へは峠越えとなる。記紀では神武天皇が大和に入ったとされる墨坂峠で、国道の西峠交差点付近に石碑が残る。

峠を榛原に下ると伊勢街道は二つのルートに分かれる。一つは比較的平坦な「青山越え」として東の三重県名張を通り松阪へと向かう道で、長谷寺参拝の道でもあることから「初瀬街道」と呼ばれる。そして古くからの道は「伊勢本街道」として南へ下る。いくつもの峠を越える険しい道だが伊勢への最短ルートである。

榛原は伊勢参宮と初瀬詣の双方の宿場として、幕末には 33 軒の宿屋・商家が並んでいたとされ、街並みは当時の面影が今もしのばれる。

2 つの街道の分岐点である萩原の札の辻には分岐を示す石碑が残り、「右いせ本かい道」「左あをこ江みち」と刻まれている。文政 11 年（1828）に建てられたものだが、当時、両街道は本街道名を争った事件があり、奈良奉行の裁決を仰いだという。

札の辻から伊勢本街道を進むと、宇陀川のほとりに墨坂神社が建つ。第 10 代崇神天皇期の創祀とされ、1450 年に墨坂峠からこの地に遷座した。

墨坂神社を過ぎると、街道は宇陀川に沿ってよいよ山間部に入っていく。（山城 満）